

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00366

研究課題名(和文) 古代・ルネサンス期の宇宙観とモダニズム期四重奏文学開花との関係性の分析

研究課題名(英文) Analyses of the Relationship between Visions of the Universe in the Ancient and Renaissance Periods and the Flowering of the Modernist Musico-Literary Quartets

研究代表者

馬籠 清子(MAGOME, Kiyoko)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：60463816

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：古代ギリシャ・ローマ期とルネサンス期の宇宙観に注目し、その伝統を土台として開花した「モダニズム期四重奏文学」を分析した。これは、前の2つの研究課題「モダニスト四重奏文学の共時的分析」(2008年から2012年)と「20世紀半ばのカルテットの世界観の分析」(2013年から2017年)に通時的な視点を加えて発展させたものであり、また、次の研究課題「対位法と弦楽四重奏がモダニズム文学を通して生み出す未来のヴィジョンの分析」(2023年から2027年)の土台となる研究となった。

具体的な成果としては、5年間に、欧米で4本の査読付き論文を出版し、さらに、継続して欧米の査読に送る論文2本を執筆中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、一般的に、ある特定のモダニスト作家や作品とある音楽との関係に注目した研究が多かったが、本研究は「モダニズム期四重奏文学」という共時的ネットワークを浮かび上がらせた。また、通時的視点から、それが古代ギリシャ以来の宇宙観と深く結びついた伝統と革新の歴史、そして未来のヴィジョンを反映するということを明らかにした。

特に、ベートーヴェンの後期弦楽四重奏曲といった特定の作品群にモダニスト作家たちの注目がかなり集中しているという事実を当て、そこから、共時的・通時的分析を展開したことで、ダイナミックな社会的・歴史的文脈の中に、具体的に「モダニズム期四重奏文学」を位置付けることができた。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on the views of the universe in the ancient and Renaissance periods and explores how the traditional views influenced the flowering of musico-literary quartets during the modernist period. The research was conducted based largely on the results of the two research projects for Grants-in-Aid for Scientific Research, "Synchronic Analyses of Modernist Musico-Literary Quartets" (2008-2012) and "Analyses of the World of Musico-Literary Quartets in the Mid-Twentieth Century" (2013-2017), and became the basis of the next research project, "Analyses of the Future Visions Evoked by the Relationship between Counterpoint and the Modernist Musico-Literary Quartets" (2023-2027). The results of the research so far have been published as refereed journal articles/book chapters in the United States, Switzerland, and Germany and are supposed to be published in Europe and the United States.

研究分野：人文学

キーワード：古代 ルネサンス 宇宙観 モダニズム 弦楽四重奏 文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究課題には、その土台となる 15 年以上の日米での研究があった。アメリカの大学・研究所における最初の約 10 年間は、muscio-literary, socio-aesthetic studies という音楽と文学の関係、これらの芸術と社会との関係进行分析する研究を行っていた。成果は、例えば、1890 年から現代までの西洋音楽とアメリカ文学との関係、これらのハイブリッドな芸術と社会との関係に焦点を当てた *The Influence of Music on American Literature Since 1890: A History of Aesthetic Counterpoint* (The Edwin Mellen Press) という査読付の単著として 2008 年にアメリカで出版された。この研究書の第 3 章では、モダニズム期のアメリカで起こった「四重奏文学」の開花を指摘・分析したが、その際、これはアメリカのみでなく、ヨーロッパや世界各地でも起こった現象だという事実に関心し、さらに、関係者の多くが世界的に評価の高い作家たちだという事実にも興味を持った。

(2) 世界同時多発的な「モダニズム期四重奏文学」については、日本に来てから、2 つの科研費研究課題として共時的視点で分析を進めてきた。そして、このユニークな文学の大きな土台が、古代ギリシャ・ローマ期やルネサンス期、その他の「4」にまつわる宇宙観（四大元素説、四体液説、四気質説、四季、など）にあると明らかになってきたため、今度は、通時的な視点を強化して、研究を大きく発展させようとするに至った。また、この通時的な流れの中で、音楽における「4」の小宇宙とも言える弦楽四重奏の演奏形態や作品構造の登場と変遷、具体的および象徴的イメージ、文学を惹きつける特別な魅力や刺激の源、などについても、より深く分析を進めることとなった。

2. 研究の目的

(1) 「モダニズム期四重奏文学」という文学作品群について、それまで重ねてきた共時的視点から、より幅広いモダニズム期の作家・作品を分析することに加え、新たに通時的視点から、古代ギリシャ以来の伝統のダイナミックな変化・発展の分析を徹底させることが大きな目的となった。そして、両方の視点での分析を丁寧に組み合わせた「モダニズム期四重奏文学」の全体像を鮮明に浮かび上がらせ、その独特の影響を探ることを目指した。同時に、この研究は、モダニズム文学の重要な一側面を浮かび上がらせることを期待しながら進めるものとなった。

(2) 研究を効果的に進めるため、以下の 3 つの問いに答えることを具体的な目標として、分析に取り組んだ。18 世紀後半に成立し、19 世紀初めにひとつのピークを迎えた「弦楽四重奏」という重要な音楽の基本構造が、なぜ、100 年以上も経ってから、世界各地の文学の中に爆発的・同時多発的に現れたのか？ 「モダニズム期四重奏文学」に何重にも複雑に、豊かに反映されている古代ギリシャ・ローマ期やルネサンス期、その他の様々な「4」の宇宙観は、どのように絡み合いながらどう機能しているのか？ この「モダニズム期四重奏文学」がもつ独特の機能は、どのような形で当時の、そして現在や未来の読者や社会を刺激し、影響を及ぼすのか？ これら 3 つの目標の設定は、次の「研究の方法」を具体的に考える際に役立った。

3. 研究の方法

(1) 上記については、弦楽四重奏の歴史を深く掘り下げ、どのタイミングで弦楽四重奏のどんな魅力がモダニズム期の文学を惹きつける原因となったのかという点に注目した。その際、モダニズム期の多くの作家たちが魅了された曲が、約 100 年前に作られた Ludwig van Beethoven の後期弦楽四重奏曲（特に第 15 番）であることに焦点を当てた。音楽関係の資料を精読し、分析しながら、モダニズム期の文学との関係を探った。

(2) 上記については、Pythagoras らの音楽と数にまつわる宇宙観を出発点として、古代ギリシャ・ローマ期、ルネサンス期における西洋の宇宙観に注目し、それが弦楽四重奏という「4」を土台とする演奏形態や作品構造とどう結びついていったのか、また、この音楽的小宇宙が、モダニズム期の文学とどう結びついていったのか、という点に焦点を絞った分析を深めた。特に、Thomas Mann の *Doctor Faustus* が、この歴史を濃厚に反映した作品であるため、小説の丁寧な分析を、通時的変化・発展を明らかにする絶好の機会と考えた。

(3) 上記については、それまでの研究で明らかになりつつあった点を再確認することから始めた。つまり、音楽と文学とのハイブリッドな表現である「モダニズム期四重奏文学」は、古代以来の伝統の豊かさと重みを土台・原動力とし、世界各地で同時多発的に活躍した、という点に注目した。そして、「モダニズム期四重奏文学」が持っている爆発的影響力は、特にどこに向かって機能し、どんな効果を生み出すのかという点に焦点を当てた。過去や伝統を土台として現在や未来に、そして、音楽・文学という芸術領域から社会全体に向けて、大きな刺激を与え得ることが予想され、ここに注目しながら具体的な個々の作品と、それらを関連付けた全体像との分析を

進めた。

(4) 互いに関連し合う一連の科研費研究課題では、Marcel Proust、Virginia Woolf、James Joyce、Aldous Huxley、Jean Rhys、Carson McCullers、T. S. Eliot、Thomas Mann、Lawrence Durrell、Doris Lessing、Vladimir Nabokov、Samuel Beckett といったモダニズム期に活躍した作家に注目している。その中で、本研究課題では、具体的な分析対象として、Virginia Woolf の“*The String Quartet*” (1921)、Aldous Huxley の *Point Counter Point* (1928)、Carson McCullers の音楽に関連する短編小説作品全て、T. S. Eliot の *Four Quartets* (1943)、Thomas Mann の *Doctor Faustus* (1947)、そして、Vladimir Nabokov の音楽に関連する短編小説と *Nabokov's Quartet* (1966)とした。

4. 研究成果

(1) 一連の関連し合う科研費研究課題の成果全体を、最終的には1冊の研究書として海外で出版することを目指しているため、部分的な研究成果がまとまる度に、海外の査読付き学術誌や研究書の章として出版し続けることに力を入れた。また、この形での出版は、本研究課題終了後も続いている。

(2) 2020年にアメリカで出版された研究書 *Understanding the Short Fiction of Carson McCullers* では、“Carson McCullers’s Musico-Psychological Narrative and American Democracy during World War II: ‘Madame Zilensky and the King of Finland’ in the Socio-Political Context”という論文を発表した。これは、McCullers の音楽に関連する短編小説全てを視野に入れつつ、特に“Madame Zilensky and the King of Finland”という作品に注目して分析を行ったものである。McCullers は、同時代の多くの作家と違い、コンサートピアニストを目指して音楽を勉強したという過去を持つため、文学作品の中で音楽を活躍させる方法が、高度に洗練されている。弦楽四重奏の演奏形態や音楽構造を思い浮かべさせる他の短編小説や、代表作 *The Heart Is a Lonely Hunter* (1940)などを発表しつつ、McCullers は同時期に、伝統的な対位法であるカノンやフーガを巧みに使った“Madame Zilensky and the King of Finland”も出版していた。この短編小説は、あるアメリカの大学の音楽学部が舞台となっており、音楽の専門用語や理論が違和感なく活躍する上、小さな舞台が第二次世界大戦という大きな世界的状況と関連し合う構造を持っている。そして、作者が当時のアメリカ人読者に、戦争に対するアメリカの考えや態度について、音楽と文学のハイブリッドな芸術を通して、巧みに問いかけているのではないかと考えられる。この分析は、McCullers が、音楽と文学との絡み合いを、個人的な芸術上の興味として捉えていただけではなく、その絡み合いから生まれる力が、読者の内面世界や作品外の社会的状況へと大きく働きかける可能性にも注目していたことを浮かび上がらせるものとなった。そして、特に、弦楽四重奏を思い起こさせる McCullers の文学的手法や構造は、未来の社会への大きな刺激になり得ることが明らかになった。

(3) 2020年にフランスの研究者たちが企画し、スイスで出版された研究書 *The Five Senses in Nabokov's Works* では、“Vladimir Nabokov’s Musico-Literary Microcosm: ‘Sounds,’ ‘Music,’ and *Nabokov’s Quartet*”という論文を発表した。Nabokov は、モダニズム期のコスモポリタンを代表する作家と言えるが、彼の様々にユニークな特徴のひとつとして、音の羅列が音楽には聞こえない脳をもつ *amusia* である可能性が高いというものがある。これは、本人が繰り返し話したり書いたりしていることに加え、脳科学の専門家たちもそう指摘している。興味深いのは、音楽について感覚的によく分からないはずの Nabokov が、音や音楽にまつわる作品を繰り返し書いているという点である。本論文では、この点に注目し、最新の *amusia* 研究成果も取り入れながら、彼の音楽にまつわる短編小説を分析した。特に、1920年代から1950年代にかけて、ヨーロッパやアメリカの様々な場所で書いた短編小説の中から、Nabokov 自身が4作品を選び、*Nabokov’s Quartet* というタイトルをつけて出版したことは、注目に値する。これらの作品の中で、音楽に明確な焦点が当たることは全くないが、1冊の短編集としての *Nabokov’s Quartet* には、弦楽四重奏の演奏形態や音楽構造の特徴などが、見事に反映されていると考えられる。また、この短編集は、Eliot が1935年から1942年にかけて創作した4つの独立した作品を集めた詩集 *Four Quartets* を意識して出版したものと考えられ、この関係性の分析は、「モダニズム期四重奏文学」の全体像を考える上で重要なものとなった。

(4) 2021年にアメリカで出版された研究書 *Connections and Influence in the Russian and American Short Story* では、“Vladimir Nabokov’s American Short Story Surrounded by the Image of Russia: ‘The Vane Sisters’ in *Nabokov’s Quartet* Interacting with Nathaniel Hawthorne’s ‘Young Goodman Brown’”という論文を発表した。これは、*Nabokov’s Quartet* に収録された4つの短編小説の中でも最も有名な“*The Vane Sisters*”に注目し、この作品が、音楽的弦楽四重奏の形を取る短編集全体の中で重要な役割を果たしていることに加えて、独立した作品としての内部世界では、アメリカ文学を代表する作家 Nathaniel Hawthorne の有名な短編小説“*Young Goodman Brown*”と絡み合う形を取っているという点を分析した論文である。この研究によって、Nabokov が、独自の感覚的能力を活用する形で音楽や弦楽四重奏を文学に

取り組みながら、Eliot など他の同時代の作家の弦楽四重奏へのアプローチにも絡み合い、さらには、時代を越えて 18 世紀前半のアメリカ短編小説とも絡み合うという、柔軟かつ幅広いネットワークを形成していく作家であるということが明確になった。これは、前年に出版されたもうひとつの Nabokov にまつわる論文同様、「モダニズム期四重奏文学」の全体像を考える上で、大きな成果となった。

(5) 2022 年には、ドイツの学術誌 *Symbolism: An International Annual of Critical Aesthetics* から、“The Symbolism of the String Quartet in Thomas Mann’s *Doctor Faustus*” という論文を出版した。*Doctor Faustus* は、天才的作曲家である主人公の一生を、第二次世界大戦へと向かうドイツの運命と繊細に関連付けながら進む小説であるが、この論文では、研究者たちにこれまであまり注目されることのなかった弦楽四重奏が、実は重要な役割を担っているのではないか、という視点から議論を展開した。実際、主人公は少年時代から、四大元素を実感する実験を経験したり、身近な大人が Wolfgang Amadeus Mozart らの弦楽四重奏曲を演奏して楽しむ様子を見たりしている。また、音楽に興味を持って作曲家へと成長する過程では、ドイツ・ルネサンス期の芸術家 Albrecht Dürer の代表作 *Melencolia I* (1514) に描かれている 4 x 4 の魔方陣に強烈な刺激を受けて作曲のインスピレーションの源としたり、Beethoven 晩年の傑作である後期弦楽四重奏曲の講義から大きな影響を受けたりしている。つまり、主人公の成長過程は、西洋の様々な「4」の伝統で豊かに満たされているのだ。そして、その力を土台として自らの弦楽四重奏曲を作曲・発表するのだが、この傑作を最後に、小説の表舞台から象徴的な「4」や弦楽四重奏に関わる全てが消え、物語は主人公の死とドイツの崩壊というクライマックスへと向かっていく。この構造と小説中に登場する歴史上の弦楽四重奏曲の各種活躍を丁寧に分析すると、弦楽四重奏という古代以来の「4」にまつわる豊かな宇宙観を反映した小宇宙は、伝統から新たな変化へと向かう大きな力を秘め、一度水面化に姿を消しつつも、再び未来のビジョンとして登場するという解釈が浮かび上がってくる。また、作者の Mann 自身が、*Doctor Faustus* 執筆中、日記の中で繰り返し、Beethoven の後期弦楽四重奏曲（特に第 15 番）への執着を示していることから、弦楽四重奏に注目した作品分析の視点は効果的だと考えられる。さらに、*Doctor Faustus* 執筆中に、出版されたばかりの Eliot の *Four Quartets* を受け取っていることから、実際に Mann が Eliot の詩集を読んだかどうか、影響を受けたかどうかは不明でも、少なくとも、1940 年代半ばが「モダニズム期四重奏文学」の重要な時期であることが明らかとなった。

(6) 本研究課題の期間終了後も、引き続き、成果の発表が続く予定である。公募の審査に送るために執筆中の Huxley の *Point Counter Point* についての論文では、この小説の重要場面に、必ず Beethoven の後期弦楽四重奏曲（第 13、14、15 番）が登場することに注目する。小説中の Beethoven 後期弦楽四重奏曲の活躍を分析するのは当然だが、これまでの多くの研究者の分析と違い、そこから、Huxley と直接親交のあった 3 人の代表的モダニスト作家（Woolf, Eliot, Mann）が同じ弦楽四重奏曲を文学作品の中でそれぞれどう活用したのか、彼らがそれぞれ生み出した四重奏文学は互いに影響を与え合っていたのか、という点を掘り下げていく。これは、Huxley を中心に据えた視点からの、モダニズム期四重奏文学のネットワークの一側面を解明する研究となる。一方、既にプロポーザルが合格しているモダニズム再考をテーマとした研究書（仮題：*Modernism Re-Imagined*）で担当する章では、Eliot の *Four Quartets* において重要な役割を果たす表現、“the still point of the turning world” を、弦楽四重奏の演奏形態や音楽構造との関連から分析する。また、この表現のバリエーションとも言える表現が、他の「モダニズム期四重奏文学」の作家たちそれぞれにも見られるので、この点での比較分析を深め、「モダニズム期四重奏文学」の全体像を浮かび上がらせることを試みる。これは、本研究課題のひとつのまとめとなると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Kiyoko Magome	4. 巻 22
2. 論文標題 The Symbolism of the String Quartet in Thomas Mann's Doctor Faustus	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Symbolism: An International Annual of Critical Aesthetics	6. 最初と最後の頁 253-272
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/9783110775884-015	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Kiyoko Magome (Eds. Jeff Birkenstein and Robert C. Hauhart)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Lexington Books	5. 総ページ数 299
3. 書名 Connections and Influence in the Russian and American Short Story	

1. 著者名 Kiyoko Magome (Eds. Marie Bouchet, Julie Loison-Charles, and Isabelle Poulin)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 383
3. 書名 The Five Senses in Nabokov's Works	

1. 著者名 Kiyoko Magome (Eds. Alison Graham-Bertolini and Casey Kayser)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Mercer University Press	5. 総ページ数 218
3. 書名 Understanding the Short Fiction of Carson McCullers	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------